新しい養蚕の可能性に取り組んで

株式会社絹工房　養蚕事業部
マネージャー　金子　聡

自分たちで必要な繭を作ろう

自社養蚕の必要性

2014（平成26）年、富岡製糸場が世界文化遺産に登録され、全国各地からの多くの観光客でにぎわい、一時は多くのマスコミ等でその名が知られるようになった群馬県富岡市。富岡製糸場近くにある弊社直営店にも、多くの観光客が来店、弊社主力商品である富岡産シルク配合の化粧品類がお土産として、また、自身のスキンケアで使用されるものとして、お買い求めいただいている（写真1、2）。

主な商品販売方法は、富岡市内での直営店、また県内外での委託販売、そして通信販売である。通信販売でのリピーターは年々着実に増え、今年度で1万人に達した。

写真1：株式会社絹工房本店

また、昨年（2015年）より繊維製品の開発、つまり、富岡シルクを使用した毛布の販売も開始した。これはふるさと納税特典対象にもなり、販売数は約70枚ほどであった。

これらの原料として、富岡産シルクの需要が増加した。原料となる富岡市内で生産される繭の生産量は年々減少してきており、養蚕農家の平均年齢も高くなってきている。

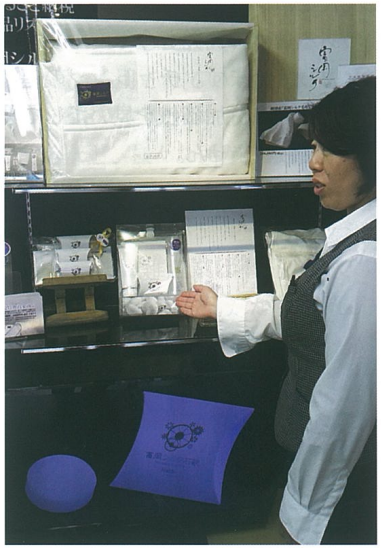

写真2：店内での商品説明

このような状況を基に、今後の弊社での繭の使用量を予測すると、生繭で少なくとも年間2トンである。可能な限り早急、かつ、安定的に、自社で確保する必要がある。このことを踏まえ、弊社では5年ほど前から対策を模索してきた。そこで、「自分たちで必要な繭を作ろう」というシンプルな答えに従い、自社での養蚕を企画したのである。以下、社内での養蚕事業体制の確立の一端を紹介する。

桑畑の確保の難しさ

当然のことながら蚕を飼育するのは桑が必要となる。最初に取りかかったことは桑畑の確保であった。先ずは、最近まで養蚕をされていた元農家の方から桑畑を50a借り、数年間手入れのされていなかった桑を剪定（せんてい）し、畑として使える状態にすることから始まった。しかし、そこから同時に桑畑の確保の難しさを知ることになった。弊社の当初の目標は、年間の収繭量を1,200kgとしているが、桑畑50aでは全く不足するために、他の桑畑を探し始めた。しかし、なかなか見つけることは出来なかったのである。そこで、新規に桑畑を造成することを決め、造成地を探すことにしたのだが、これもまた難航したのである。

何故なら、富岡では下仁田（しもにた）ネギやこんにゃくなどの野菜が多く栽培され、周辺の農薬などの心配があり、そういった環境の中での桑畑の造成は危険すぎたのである。結局、数年かかって山間部の森に囲まれた耕作放棄地を見つけ、借り受けることになった。そこをようやく造成し、苗を植えることができたのである。それと併せて近隣に蚕室となる建物を借り受け、改築し2015（平成27）年より蚕の飼育を始めることになったのである（写真3、4）。

写真3：桑苗を植える作業

写真4：4齢起蚕と新規飼育台

新しい養蚕方法の模索

養蚕を本格的に行うにあたって、ここでも問題に直面した。必要な資材や道具などの入手である。養蚕資材は製造されていないために新品を簡単には手に入れにくい。それで農家などから不要になった資材をいただくのが唯一の方法であり、当然のことながら、私も資材の確保に市内を走り回りまわった。この資材入手の問題を認識した

時に、養蚕というものをするには「過去」の資材が必要になるということ、つまり、将来的な資材調達、飼育システムなどを先に考えないと、将来的に続かないだろうということに思い至った時でもあった。

そこで資材や道具を見直し、可能なものは代用し、または新規で作ることにした。従来のものを単純にリメイクするのではなく、資材一つ一つが持っている意味や利便性を考え直し、他に適した素材や、入手が容易な資材、それらの活用方法の研究から弊社の本当の養蚕が始まった。例えば、現代の日本人の平均的な体格を考えると、従来の飼育台では給桑（きゅうそう）や、上蔟（じょうぞく）、飼育後の後片付けなどの中腰の姿勢は腰などに負担が大きくかかる。では、これらの作業を身体的な負担をかけずにするにはどうしたら良いか。企業として養蚕業務を行っていく上で、身体的負担は長期就業に大きな妨げになってくる可能性がある。人間の作業には限界があり、それを改善できる方法を常に考えていく。新しい養蚕、企業養蚕を行うことのためには、一つの方法や視点だけではなく、広い視野で養蚕を見ていくことも必要なのかもしれない。

このように、養蚕というものを時代の変化に合わせ、そのための環境づくりや新たな方法を模索し続けることを重要なテーマとして、企業養蚕を進めているところである。また、弊社で養蚕事業に従事する社員は年代が若いことから、彼らにとって受け入れやすい方法や資材、そして養蚕に付随する業務を新しい視点での見直しや検討を行い、飼育などの養蚕体系を常に更新し続けることが、企業養蚕の今後につながるのではないだろうか。

長期的に持続可能な養蚕

昨年（2015年）、企業養蚕のスタートを切ったが、多くの課題がある。桑畑、飼育・桑園管理資材、そして企業として就労環境や社員の目的意識など多岐にわたる様々な事項である。そして、企業として養蚕を行っていく上での経営目標は、長期的に持続可能な養蚕を行うということである。つまり、養蚕に取り組む時には、「100年後にも事業が継続しているか」を常に念頭に置いておく必要がある。

長期的に継続させるには何が必要か、何を考えるべきなのか。人材育成も大きな課題であり、更には養蚕業務のマニュアル化をなしえるかどうかも含まれる。私が経験してきた中では、蚕は温度や湿度、環境によって飼育日数の変動があり、繭の状態（品質、形状）にも影響が出るということを知った。そして飼育蚕期ごとに、飼育方法や蚕室環境対策など、蚕と向き合い、数年を経験しないと見えてこない部分があることである。

しかし、それでは年度ごとに、また天候等や桑の状態、飼育場所等の環境が原因で生産量が変動することもあるだろう。そうなると常に安定した繭の確保ができない可能性もある。企業としては、この変動要因を可能な限り除去し、どのような理由にせよ、収繭が出来なかったということは避けなければならない。また、課題の一つに、急な欠員の発生時の対処を考えなくてはならない。その解決策として「誰でも出来る養蚕」の確立のための養蚕作業のマニュアル化、欠員の発生時の対処方法や、養蚕期間外の業務の確保など、総合的な企業のための養蚕システムの構築が緊急な課題である。

養蚕事業の今後と経営上の位置づけ

弊社のシルク製品のリピーターからの声に「今後ともこの商品が欲しい」という声を多くいただき、製造販売に携わる者としてこれ以上にありがたいことはないと感じている。この声に応えるためにも、養蚕事業を安定して継続させ、更には新商品の開発、シルクの持つ機能性を今以上に多くの方々への提案、養蚕に関連する事業の企画、検証などを行い、シルクの可能性を今以上に広めることを目指したいと思っている。そのために、今年度（2016年）は繭の生産量480kgを計画している。そして来年度（2017年）は生産量を1,200kgの目標を達成するために、現在、桑園や飼育施設などの増設について、より具体的な検討を行っているところである。

弊社ではシルクと私たち人間の関わる機会を増やし、シルクの素晴らしさ、シルクの長所、シルクの活用などの提案を出来る場を、直営店や通信販売で持っている。この手段を大切に活用し、新たなシルク商品の開発により商品提案していく。これに必要な繭を確保するのが、養蚕事業の重要な役割であると位置付けている。

■金子聡（かねこ・さとし）の紹介
株式会社絹工房　養蚕事業部マネージャー
〒370-2316
群馬県富岡市富岡1152
TEL：0274-67-5023
FAX：0274-67-7251
Mail：info@kinukoubou.com
HP：http://www.kinukoubou.com/